読売 教育ネットワーク

社会はまるごと学校――
すべての大人が先生です

数学者の秋山仁さんによる講演が好評だった交流会（11月9日、読売新聞東京本社で／2・3面へ）

巻頭特集 読売教育ネットワーク 2018 交流会

次世代の担い手育成にスクラム 2・3

サリドマイド薬害・増山さんが特別授業

薬害と人権を考える3日間（岐阜・関ケ原町立今須中） 4・5

高校生6人×三菱商事　インドネシアでビジネスの最前線取材

海外プロジェクト探検隊 6・7

第67回 読売教育賞 最優秀賞9件、優秀賞15件 8

リレーエッセー　米カールトン・カレッジ「将来のための手がかりより現在のための存在意義」 9

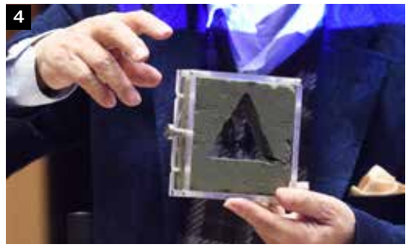
2018.11
Vol.47

次世代の担い手育成にスクラム

読売教育ネットワーク2018交流会

企業や大学、小中高校と連携して子どもたちの学びを支援する「読売教育ネットワーク」の交流会が11月9日、東京・大手町の読売新聞東京本社で開かれ、教員や企業関係者ら約100人が参加した。教育現場と社会をつなぐ接点としての活動を振り返りながら、次世代を担う若者の育成について語り合った。

ワークショップも用意された交流会。参加者は2つの連なったハートの作成にも挑戦した


4

5

3

2

1

秋山 仁さん講演「強い願望 一番大切」

模型教材使い解説

交流会では、テレビやラジオでもおなじみの数学者で読売教育賞の選考委員も務める秋山仁さん（72）が「不可能を可能にする発想の転換7か条」と題して講演。独自に開発した模型教材を多用しながら、数学的な思考について分かりやすく解説した。

紙の輪を2つつなぎ、それぞれの輪を中心線で二等分するとどんな形になるかを確かめる実演では、見事な正方形が出現（写真①、②）。驚く参加者を前に、「問題を1つずつ処理していくという数学的な考え方を用いれば、実際にやらなくても結果を予測できる」と説明した。さらに、それぞれの輪を一ひねりしてつなぎ、同じように二等分すると、2つの連なったハートが現れる実演を披露し、会場を沸かせた（写真③）

また、正三角形の穴を開けられるドリルの原理を説明しながら、常識を疑うことの重要性を説いた（写真④、⑤）。

自身の発想法を問われると、「こういうものができたらいいなという強い願望が一番重要」と極意を述べた。

老川最高顧問

活発に意見交換

その後の懇親会では、読売新聞グループ本社の老川祥一・取締役最高顧問・主筆代理が「社会全体で子どもを育てていくという基本概念で活動しており、今日は皆様方の交流を深めてほしい」などとあいさつした。

企業を代表してあいさつしたNTTドコモモバイル社会研究所の鈴木孝幸樹企画担当部長は「いろいろなメディアとの付き合い方を、学校教育の中で一緒になって考えていくことが大事」などと話した。

教育界を代表してあいさつした成城中学校・高等学校の栗原卯田子校長（前・都立小石川中等教育学校長）は「社会の中でどんな風に子どもを育てていくかを考えるとき、社会に開かれた教育が重要だと私は思っている」と述べた。

会場では、企業による出前授業など読売教育ネットワークの様々な取り組みを映像や資料で紹介。参加者は活発に意見交換し、交流を深めた。

NTTドコモ・鈴木孝幸樹企画担当部長

栗原卯田子校長

読売教育ネットワーク この1年の活動

読売教育ネットワークでは、さまざまな特別授業や特別イベントを開催しています。

参加団体　2018年11月7日現在

小中高…310、大学…66、企業…166、教育委員会…8　計550団体

出前授業・特別授業など　2017年11月～2018年10月

◇読売社員による出前授業 …… 232
◇参加企業等による小中高校への教育プログラム …… 55
◇大学や企業で定期購読の新聞を教材に、情報リテラシーや文章講座などを展開する「新聞のちから」 …… 33

主な特別授業

■ 早期医療体験プログラム
7－8月開催。医学部を目指す高校生が大学病院の救命現場で学ぶ教育支援プロジェクト。順天堂医院は16校18人、大阪大病院は11校11人を受け入れた。9月、プログラムを体験したOB・OG高校生と医学生ら約90人が集まる交流報告フォーラムが読売新聞東京本社で行われた。

■ 鍛える、食べる　トップアスリート1日合宿
8月7日開催。東京五輪で世界の頂点を狙う張本智和選手ら、次世代の日本卓球界を担う若手選手たちが、首都圏の卓球部に所属する中高生を指導した。ネットワーク参加校7校から30人の生徒が参加した。

早期医療体験プログラム

トップアスリート1日合宿

大会・イベント・セミナー

■ 書評合戦ビブリオバトル
お勧め本を出し合ってチャンプ本を決める大会。中学生、高校生、大学生などの各大会のほか、読書好きの著名人による「スター決戦」が初めて11月19日に行われた。

■ 夏休み親子新聞教室
8月4日、17日、18日に開催。親子でテーマに沿った記事を切り貼りし、世界に一つだけのスクラップ新聞を作る。

■ NIE土曜サロン
新聞を活用した授業方法などを学ぶ勉強会。ほぼ月1回開催。

■ 第1回 新聞@スクールセミナー
2月24日に開催。「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」をテーマに、約80人の教員らが学ぶ。

夏休み親子新聞教室

新聞@スクールセミナー

薬害と人権を考える3日間

サリドマイド薬害

増山さんが特別授業

薬が引き起こす健康被害（薬害）と人権について学ぶ特別授業が9月下旬、3日間にわたり岐阜県関ケ原町立今須中学校で行われた。1960年代に大きな薬害を引き起こした鎮静・睡眠剤サリドマイドが原因で、生まれつき腕が短い増山ゆかりさん（55）や弁護士、厚生労働省医薬・生活衛生局の担当者が、3年生12人に語りかけた。社会科「人権と共生社会」の授業（全5時限）について、同校の藤井健太郎教諭（42）に報告してもらった。

（上）障害を持つことを体験してみて――。指定されたページを、指を使わずに開こうと悪戦苦闘する生徒

（右）足の指を使って傘をさして見せた増山さん。「握ることができないので雨が降っても使いません」と生徒たちに伝えた

（下）どんな人権侵害があったのかを考えるグループ学習で、生徒にアドバイスをする増山さん

障害があることの意味

今須中は全校生徒34人の小規模校です。中学3年は12人しかいません。この小さな学校に増山さんが来校したのは9月27日、社会科「人権と共生社会」特別授業の2日目でした。

教室に入ってきた増山さんは、生徒たちの前で椅子に座りました。さっと靴を脱ぎ、足の指を巧みに使ってリュックのファスナーを開けると、やはり足の指で授業用の資料を取り出しました。

右肩のすぐ先にある3本の指と両足で生活する彼女にしたら、手を使わないのは自然な振る舞いですが、生徒にとって「障害があることの意味」を初めて目にした瞬間です。いつもは冷静な西村萌加（もえか）さんが身を乗り出したぐらいですから、のっけからインパクトがありました。

差別と偏見に衝撃受ける

教室で、増山さんは生徒たちの間を回りながら半生を語ってくれました。心臓に穴が開いていたため、生後すぐに北海道の親元を離れて都内の病院に入院したこと。なかなか歩けず、看護師さんに背負われて病院で暮らしたこと……。

話は、歩けるようになった小学生時代へと続きました。石を投げられたことは一度や二度ではなく、ラーメン屋に入ったら「迷惑になるから出ていってくれ」と言われたこともあったそうです。

「北海道に戻った私を待っていたのは両親の離婚と家族の離散でした。私は家族と暮らしたことがありません」と増山さんが明かすと、うつむく生徒がいました。一言も逃すまいと、食い入るように聞く生徒もいます。真面目なクラスですが、いつもと違う空気が教室に流れていると感じました。

「いじめにあったり、家族と会えなかったりするのは私には耐えられない」「どれだけ精神的に追い詰められたのか、はかりしれない」

講演直後、12人が書いた感想文には、増山さんに心を揺さぶられた思いがあふれていました。

憲法と比較、人権を考える

この日の目的は、増山さんの体験をしっかりと受け止め、「薬害は、どのような人権侵害につながるのか」を考えることです。

講演後の50分はグループ学習とし、薬害が侵す国民の権利について話し合い、発表しました。

「石を投げられたことは、憲法が保障する『個人の尊重』が侵害された」。こうノートに書いたのは谷口紗弓（ゆん）さんです。「希望する職業を目指せないのは『職業選択の自由』を侵す」とも考えました。

発表後、平松卓也弁護士（37）に登壇してもらいました。生命の危機があったことから生存権が脅かされていたことや、障害が原因で望むことができないのは幸福追求権の侵害につながるなど、生徒が気づかなかった点を解説してくれました。

憲法が保障する人権について詳しく解説する平松弁護士

なぜ被害が拡大したか

学習計画を作るうえで注意したのは、サリドマイドについての生徒の知識は乏しいという点です。なぜ、この薬害が起きて拡大したのかを学ぶため、私は被害者団体が公開する資料や新聞記事などから、生徒向けに年表を作りました。

サリドマイドの危険性が初めて警告されてから、販売停止・回収されるまでの日欧の動きを比較して、三和日那乃（ひなの）さんは「日本で被害が拡大したのは、審査の不備や初期対応の遅れ、被害発生後の対応の不徹底が主な原因だった」とまとめました。「同じことを繰り返さないための制度を整える必要がある」と一歩踏み込む生徒もいました。

薬害起きない社会を

最後は、どうしたら薬害が起きない社会を作れるのかを考える学習。新薬が認可され、国民に届くまでの流れの図を用意しました。

ここで驚いたのは、山田真衣さんが図に書き加えた内容です。「国民」から「国」に向けて矢印を書いて、「被害を伝える情報機関を作る」というメモも記しました。

「副作用の情報をすぐに国に伝える窓口があれば、被害拡大を防げる」という彼女の発想は、実はとても鋭いのです。2004年に創設された独立行政法人「医薬品医療機器総合機構」（PMDA）が、この役割を担っているからです。厚生労働省から来校した医薬品副作用被害対策室の方々もPMDAの役割などを説明し、国民目線で薬や医療機器をフォローしていることを話してくれました。

■ 薬害はどんな人権を侵害したか 生徒たちの考え

被害者たちが受けた差別・偏見	侵害された権利
店から追い出された	×平等権
歩いているだけで石を投げられた	×平等権、自由権
血がけがれていると言われた	×法の下の平等
家に閉じこめられた	×隷属的拘束からの自由
受験できる大学が少なかった	×学問の自由、教育を受ける権利
就きたい職業が選べなかった	×職業選択の自由

■ 年表 サリドマイド薬害

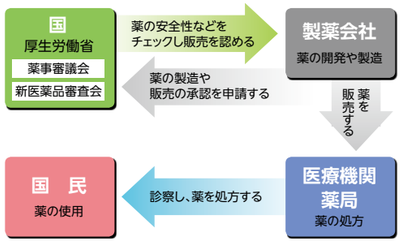
1960年前後に催眠鎮静剤として使われ、日本の製薬企業が販売停止・回収を発表したのは1962年9月13日、諸外国の対応から10か月遅れた。1974年、国と製薬企業が因果関係と責任を認めてサリドマイド訴訟は和解した。

1957年10月	○西ドイツで鎮静・睡眠剤として発売、その後世界約40か国で販売される
1958年 1月	○日本でも「イソミン」として販売、「妊婦や小児が安心して飲める安全無害な薬」と宣伝される
世界各地で手足や耳に奇形をもった子どもたちが生まれる	
1961年11月	○西ドイツの小児科医・レンツ博士がサリドマイドの危険性を学会で警告する。10日後、ヨーロッパでは薬の製造・販売が中止され、回収が始まる ○日本の厚生省（当時）はレンツ警告に「科学的な根拠がない」として販売を継続する
1962年 9月	○日本の厚生省や製薬会社が販売停止と回収を発表

公益財団法人いしずえ『いしずえ30年の軌跡』より作成

■ 新薬が国民に届くしくみ（1960年代当時）

※現在、薬事審議会と新医薬品審査会は改称・改編されている



厚生労働省の担当者は、現在の医薬品を審査して安全性をチェックする仕組みについて話した

夢を目指す権利 失わないために ―― 授業を振り返って

今須中学校 **藤井 健太郎** 教諭

今回の試みは薬害について学ぶ方法を探る厚生労働省のモデル授業として行ったものですが、私には「薬害を通して人権を学ぶ」という大きな目的がありました。

私は人権が保障される社会こそが、平和を実現できると考えています。2016年から広島への修学旅行を引率して生徒と一緒に被爆体験談を聞いていますが、被爆者は後遺症に苦しむだけでなく、いわれのない偏見や差別を受けてきたことを知りました。以来、人権について理解を深める教育の充実を図りたいと思うようになったのです。

サリドマイドの薬害について、実は私も詳しく知りませんでした。

実態が見えてきたのは、厚生労働省との打ち合わせや公開されている資料を調べてからです。腕のないサリドマイド児の写真は痛ましく、被害拡大に人災の側面があったこと、それを防ぐ制度が不十分だったことは明らかでした。

増山さんは、お母様が妊娠中に飲んだ胃腸薬に含まれていたサリドマイドの副作用で、障害を持って生まれました。彼女から直接話を聞けば、「同じ過ちを起こさない社会にしないといけない」と、生徒たちは考えられると思いました。

人権という言葉はよく聞きますが、抽象的であり理解するのは簡単ではありません。増山さんが受けた偏見や差別を、憲法が保障する権利と照らし合わせたことにより、生徒のなかで人権が具体化しつつあると手応えを感じています。

授業後、山田怜君は「どんな障害があっても人間であることに変わりはない。誰もが生きたいと思えるような社会を築く必要がある」と人権への理解を深め、そもそも生きるとは何なのかを考えるようになったと言います。松井彩乃さんは町内会で募金活動のボランティアに取り組むなど、実際に行動を起こしはじめました。

進学したい高校や就きたい仕事など、生徒たちにはたくさんの夢があります。でも、夢を目指す権利は一人ひとりが努力しないと失われてしまうかもしれないことに気づいてほしかったのです。

ビジネスの最前線取材

海外プロジェクト探検隊

インドネシアで高校生６人

高校生が海外のビジネス現場を訪れ、世界の「今」を取材する「海外プロジェクト探検隊」。今夏は６人の高校生が、「共に築くアジアの未来」をテーマにインドネシアを訪れ、三菱商事が関連するビジネスの最前線を取材した。

主催・読売新聞社、特別協賛・三菱商事

大迫力のＬＮＧプラント

縦横無尽に張り巡らされた大小のパイプ。その奥には液化天然ガス（ＬＮＧ）を貯蔵する巨大なタンク。三菱商事が最大株主として主導する「ドンギ・スノロＬＮＧ社」の視察では、初めて見るプラントの迫力に、６人は圧倒された。ここで生産されるＬＮＧは年間約１３０万トンが日本に、約70万トンが韓国に運ばれ、東アジアのエネルギー安定供給を支えている。インドネシア人や日本人、英国人、韓国人など多国籍な社員約３００人が働いており、英語で行われる朝の会議にも参加させてもらった。

1. 巨大設備が立ち並ぶドンギ・スノロLNGのプラントを見学する6人
2. 様々な国籍の人たちが働いているドンギ・スノロLNG
3. ドンギ・スノロLNGの視察を終え、ルウク空港で

4. ローソンでは日本と同じようにおでんやホットスナックが並ぶ
5. 激辛インスタント麺などを試食
6. 昔ながらの市場の野菜売り場
7. 三菱商事の倉橋政嗣・インドネシア総代表
8. 日・インドネシア国交樹立60周年について説明する中村亮公使
9. 交流した日本語ミュージカル劇団「en塾」のメンバーと記念撮影

小売の現場も

探検隊は小売りの現場も取材した。三菱商事は現地企業や日本の企業と手を組み、インドネシアで食品や飲料、紙おむつなどの生活必需品の事業を手がけている。６人は激辛インスタント麺を試食したり、昔ながらの市場やコンビニの「ローソン」などを巡ったりして、日本のビジネスモデルを基にインドネシアでどのように事業展開されているかを学んだ。

このほか、ジャカルタにある日本大使館を訪れて国交樹立から60年を迎えた日本とインドネシアの関係を学習したり、同世代の若者と交流したりして、海外の大きさを知る貴重な機会となった。

探検隊に参加して

知識と現実との違いから学ぶ

初めてのインドネシアは、日本と所得も文化も宗教もまるで違う「未知」の世界だった。事前に日本でたくさんの本を読み、小売りの現場などを視察して行ったことが大きく役立った。ビジネスの最前線を自分の目で見ることができたのも貴重な経験で、事前の知識と現実との違いからも多くの学びがあった。尊敬できるほかの探検隊の仲間と出会えたことも良かった。

石川陽太 さん
東京・開成高校２年

海外に出る大切さ学ぶ

「世界は広い」。それを強く感じた６日間だった。いつも日本を内側からしか見ていなかったが、海の外から日本を客観的に見つめるいい機会になった。取材に参加し、これまでは遠い存在だったインドネシアへの関心が高まった。海外に出ることの大切さも実感できた。大学に進学したら海外に留学してみたい。そして、視野を広げ、海外と関わる仕事に就くという目標ができた。

池田萌芽 さん
東京・渋谷教育学園渋谷高校２年

親日的な人々

地元の気仙沼にも多くのインドネシア人が水産加工会社で働いている。今回の取材を通じて、インドネシアがどんな国なのか、どんな人々が暮らしているのかを垣間見ることができたし、滞在中はたくさんのインドネシア人に優しくしてもらった。とても親日的な彼らのことをあまり知らなかったが、地元に帰ったら、市民とインドネシア人との交流の場を作っていきたいと思う。

菅野 匠 さん
宮城県気仙沼高校２年

英語へのモチベーションあがる

初めての海外となった今回の取材。これまで、日本は何事にも優れているＮＯ．１の国だと思っていたけど、海外には自分がまったく知らないことも、日本より優れているところもたくさんあることがわかった。大学生になったら積極的に海外に行ってみたい。英語に対するモチベーションもあがり、英語の勉強がより好きになった。私もいつかインターナショナルな現場で働いてみたい。

佐藤珠弥 さん
神奈川・洗足学園高校２年

対等なパートナーとして

「インドネシアの発展のため、相互の信頼関係を大切にしながら事業を展開している」ということが、現地で働く三菱商事の社員の様子からもよく分かった。上から目線ではなく、対等な立場のパートナーとして、世界でビジネスを行うことの大切さを学んだ。探検隊に参加したことで積極性も身についた。これからの人生でも積極的にたくさんの人と出会い、いろんな話を聞いてみたい。

中尾竜也 さん
大阪府立北野高校２年

活気にあふれたインドネシア

何より印象的だったのは、国全体が活気にあふれていたということだ。現地の文化や慣習を尊重しながら、日本のやり方を上から押しつけるのではなく、「共に繁栄しよう」と対等な姿勢で取り組んでいる三菱商事の社員の方々が輝いてみえた。国の発展を支えるのは若者の力だ。私たちがこれからどんな夢を描き、それを形にしていくか。それを強く考えさせられた。

高井南帆 さん
埼玉県立浦和第一女子高校２年

「学ぶ教師」にエール

第67回 読売教育賞

最優秀賞9件、優秀賞15件

学校や地域での優れた教育実践を顕彰する「第67回読売教育賞」は全13部門に150件の応募が寄せられた。最優秀賞は9部門で9件、優秀賞は11部門で15件が選ばれた。最優秀賞の表彰式は11月16日、高円宮妃久子さまをお迎えし、東京・大手町の読売新聞東京本社で行われ、受賞者らに盾と副賞50万円が贈呈された。

表彰式のレセプションで受賞者らと懇談される高円宮妃久子さま

※敬称略

優秀賞

■ 算数・数学教育
「生徒が主体的・対話的に和算を解釈・表現する指導実践」
茨城県立竜ヶ崎第一高校 代表・小林徹也

■ 理科教育
「未来を拓く科学大好きっ子の育成を目指して」
NPO法人日立理科クラブ 代表・滝沢照広

■ 社会科教育
「公民科教育にできることグローバル教育から主権者教育へ」
千葉県立白井高校教諭 小島江津子

■ 健康・体力づくり
「熊本地震からの『創造的な復興』のための心のケアの充実」
熊本県山鹿市立大道小学校教頭 百田止水

■ 外国語・異文化理解
「情動的痕跡を残す英語科教育 人格形成の契機を目指して」
京都府城陽市立北城陽中学校教諭 内貴真美子

■ カリキュラム・学校づくり
「チームで挑む！高校における授業改善」
福井県立武生高授業改善プロジェクトチーム 代表・辻崎千尋

■ 地域社会教育活動
「アジアと地域の支え合いを生み、若者が変わる社会参画の教育実践」
茨城県立取手第一高校教諭 大滝修

■ NIE
「『みんな』のNIE・『みんな』でNIE」
熊本県八代市立郡築小学校 代表・中野聖規

■ 特別支援教育
「通常の学級と特別支援教室の協働的な授業づくり 発達障害児の考える力を高めるための指導の工夫」
東京都立川市立第七小学校 代表・菅原真弓

優秀賞

■ 国語教育　川崎市立富士見台小学校教諭・土居正博／お茶の水女子大学付属中学校　■ 算数・数学教育　聖心女子学院教諭・森勇介　■ 理科教育　福島成蹊高校教諭・山本剛　■ 社会科教育　愛媛県西条市立大町小学校教諭・伊藤充代／福岡エクレール法律事務所代表弁護士・春田久美子　■ 生活科・総合学習　兵庫県西宮市立北六甲台小学校教諭・箱根正斉／東京都奥多摩町立氷川小学校教諭・安藤浩太　■ 外国語・異文化理解　東京学芸大学付属国際中等教育学校教諭・後藤葵　■ カリキュラム・学校づくり　静岡県立田方農業高校　■ 地域社会教育活動　山口県萩市立大島小中学校　■ NIE　静岡市立井宮小学校教諭・中村都／鳥取市立桜ヶ丘中学校司書・山田富美子　■ 特別支援教育　千葉県立桜が丘特別支援学校教諭・茂原伸也　■ 音楽教育　東広島シュタイナーこども園さくら理事長・広瀬俊雄

選考委員会の座長を務める
谷川 彰英 筑波大学名誉教授

総括

生徒の知的好奇心を刺激

―今回は応募件数が多かったが。

近年では一昨年（第65回）の160件に次ぐ多さだった。このため、全体的にハイレベルなものが多かったと思う。

―注目された教育実践は。

入試改革を控えた高校の先生たちの頑張りが光った。特筆したいのは、福井県立武生高校授業改善プロジェクトチーム、茨城県立竜ヶ崎第一高校、千葉県立白井高校（小島江津子教諭）の取り組み。茨城県立取手第一高校（大滝修教諭）も国際社会で頑張りを見せてくれた。

―先駆的実践を一つ挙げるとしたら。

福井県立武生高校は、古文と地学の先生が一つの授業を行うなど、教科を横断した授業を実施する大胆な取り組みで注目された。「受験」にとらわれず生徒の知的好奇心をかきたてる内容だ。今後の日本の教育はこうあるべき、かつ、こうなっていくであろうと確信させられた。生徒自身が自分の学びを作り上げるためにこそ学校がある、という教育の原点でもある。

流行にとらわれず自問自答を

―今後、応募を考えている教師らに求めたいことは。

今回、受賞にいたらなかった作品にも、将来への期待感を感じさせるものが多数あった。さらに充実した内容で再チャレンジしてほしい。新学習指導要領に沿った流行を追いかける必要はない。児童・生徒に本当に向き合っているか、質の高い教育を実践しているか、教育をさらに高めようという迫力に満ちているか、自問自答してほしい。学ぶ教師によって学ぶ子どもが育つのだから。

海外で学ぶ リレーエッセー㊼

米カールトン・カレッジ
「将来のための手がかりより現在のための存在意義」

湘南白百合高（神奈川県）卒、カールトン・カレッジ（米国）1年（執筆時）
北村杏（きたむら あん）さん

化石、恐竜、そして古代の海洋無脊椎動物。子どもだったらこれ以上何を望むだろうか。いや、この場合は、大学生か？ 私が絶対的な確信を持って断言できることは、できる限り純古生物学の講義を履修するのだということだ。しかし、この古生物学への憧れで、私は何をしようとしているのか。今なお、その手がかりを持ち合わせていない。

大学卒業後にまともな生活が送れるよう、もっと実際的な科目をとるべきではないの、という両親のぶつぶつ言う声が聞こえる。自分でもそう考えるときはあった。このすばらしい世界を学びたいなんて、単なる子どもの夢ではないのか。化石の見分け方が自分の将来にどう役立つのか。

でも、化石採集旅行の準備をしているときの、教授の興奮した声、級友たちの大騒ぎは、頭の中で鳴り響く疑念の声を静めるのに十分な音量だった。私が初めて化石を発見したとき、顔に浮かぶにんまりした笑顔、私や級友が見つけた化石を特定しているときの集中力と真剣さ。これは知恵とか知識とか、いわゆる大学で学ぶこと以上の価値がある。これが、私のカールトンでの存在意義になるのだ。

大学とは人生という細道のなかの短い通過点、つまり、将来のキャリアで必要な技術と情報を得る手段に過ぎない、と思っていた。いや、誤解しないでほしい。今でもそうだとは思っている。だが、どうして私はここにいるのだろう？

ここに私の答え、より正確に言えば、私の存在意義があるのだ。私にとって大学は学びの場だ。どうして、何を学ぶかは、人それぞれ違う。しかし、私にとって学びは単なる道具ではなく、喜びの源でもある。講義や教科書から得られる知識をためこむ以上のことをやりたい。一つひとつの情報を集め、理解を深めていく過程を楽しんでいたいのだ。

これがここ、ミネソタ州南部に、純古生物学を教えてくれ、いつも授業の冒頭では「さあロックンロールの始まりだ」という地質学の教授とともに、私がいる理由なのだ。ここにいるのは、学びの喜びを知るためなのだ。

（会報編集部抄訳 The Japan News 2018年8月2日）

カールトン・カレッジ

1866年創立のミネソタ州ノースフィールドにある私立大。全米有数のリベラル・アーツ・カレッジの一つ。同大出身者に、マイケル・アマコスト元駐日大使。

学友と一緒の北村さん（前列右）＝本人提供

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイトへ。 http://ryu-fellow.org

英語の原文はhttp://the-japan-news.com/news/article/0004548895でお読みいただけます。